Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-01

なるようになる大学院（<特集>大学院で経済学を学ぶ）

堀江，進也

(Citation)
國民經濟雜誌,221(1):31-35

(Issue Date)
2020-01-10

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041955

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041955

ISSN 0387-3129

国民経済雑誌

なるようになる大学院

堀　江　進　也

国民経済雑誌　第221巻　第１号　抜刷
2020年１月

神戸大学経済経営学会

『国民経済雑誌』第221巻第１号（2020年１月），31-35

なるようになる大学院

堀　江　進　也[a]

1　はじめに

学生諸氏は，大学に入学していく分か経ったのちに，各々の将来について考え出すことだろうと思われる。時間がたつにつれて将来はより具体的な形で考えられるだろうが，その際に大学院への進学を候補に挙げる人は，それほど多くないのではないだろうか。将来を考えるうえで必要なものは，参考になるものである。それは家族であったり，日々の活動を通じて知り合う人々であったりと様々である。しかし，大学院生やその後に就職した姿としての教員が身近にいるにもかかわらず，諸氏の人生設計の参考足りえていないことは皮肉なことである。

先日，大学院進学について確信を持てない理由のひとつに自分が大学院に向いているかどうか不明なことがある，という大学生と出会った。それを聞いていた私自身は，大学生としても大学院生としても決して優等生ではなく，それでも現在，研究者として生計を立てている。そこで，私は自分の経験を踏まえつつ，大学院で生き残るこつを本稿で述べようと思う。何を読むべきか，何を勉強すべきか，ではなく，気持ちのありようを含めた「こつ」は，得るべき知識と同じくらいに重要である。

本稿ではまず，知識に関する不足への不安と，次に動機の維持への不安，さらに就職に関す不安への対処のこつを述べる。

2　知識不足に対する不安への対処のこつ

大学院に進学するうえで，学生諸氏が不安を感じる理由足りうるひとつ目の不足が技術と知識の不足である。「現在の自分には，授業を聞いていて理解できないことがたくさんある。そのような自分に果たして進学は可能なのか？　進学がかなったとしても，大学院で研究は可能なのか？」と考える人は多いだろう。もちろん可能である。今日できないということは，明日できないということを必ずしも意味しない。

a　神戸大学大学院経済学研究科，horie@econ.kobe-u.ac.jp

私自身も，学部生であったころに授業内容をほとんど理解できなかった。実は，私の視力はとても低く，板書がよく見えなかった。その結果，教員がどれほどわかりやすく解説を行っていても，そもそも教員が何の説明をしているのか目で確かめることに辛さを感じていた。さらに，左右の視力に大きな差があるために，しばしば目の焦点が勝手に移動し，教科書を読んでいても自分がどこを読んでいるのかわからなくなる。そのような状況では，当然授業中も自習中も眠くなり，すべての教科について苦手意識が芽生えた。苦手意識は，人の理解を大きく阻害する。実際私の成績はとても悪く，私はほとほと困り果てていた。

しかし，私は「なんとなく」大学院に進学したかった。進学には入学試験に合格しなければいけなかった。とはいえ，先述のとおり私は細かい字を読むのにも人の解説を聞くのにも困難があった。解決する方法はふたつあった。

ひとつ目は，黒板を使うことだった。私は空き教室に忍び込み，黒板に式を書きたくって架空の聴衆相手に授業をした。これは勉強にとても効果的であった。実際に手を動かすので，自分で式の展開を行う力が付いた。また，架空であろうと聴衆を相手に説明を行うとなれば，一定の量の知識をそらで，かつ円滑に話さなければならないので，本の内容を理解しながら頭に焼き付けることができたのだ。さらに，これは一度では上手にできないので，反復練習をすることになる。反復するうちに，説明や板書を端折りたくなるのだが，どこを端折っていいのか，端折ってはいけないのかを考えるようになった。そして何より，声を出すことはストレスの発散につながった。

ふたつ目は，スタディーグループを作って勉強することだった。ひとりで勉強すると，分からないところは，よほど時間をかけないとずっと分からないままである。スタディーグループを作れば，互いに分からないところを補い合うことができる。人に説明することが自分のためにもなるのは，先述のとおりである。そして最も重要なことは，楽しいのである。無論，教員への質問はためらわれるべきものではない。ただし，自分の質問に教員が常に答えを持っていると期待してはいけない。むしろ大事なのは，答えを持っていなかったときに教員が，七転八倒しながら様々な手を駆使する様子を見るところにある。そこに学びがある。

これらふたつは，オハイオ州立大学での学力試験の前でも大きな威力を発揮したので，おそらくは今の学生諸氏にとっても有効であると考えられる。

3　動機の維持のこつ

ようやく入学がかなった大学院ではあったが，いざ生活を始めると極めて単調であることと，講義で学ぶことがどうにも理解できないことは，非常に苦痛であることに気が付いた。自分の研究は，ほかならぬ自分自身の計画の元で進められるべきであることはわかっていた。しかし，自分が追求したいことが分からない。研究計画書に書いたことは，それを書いたと

きには興味があったものの，同じ興味を維持できないこともある。また，研究対象への興味は維持できたとしても，研究活動そのものの動機を維持できないことがある。

興味あるいはやる気といった，研究の動機の維持が難しいときは，自分がしていることが核心をついた研究なのか分かっていないことが多い。また，自分自身の研究が周囲の人々と比べて優れているのか分からないとき，さらには単純に体力の低下しているときも同じようなことが起こる。

自分の研究が核心をついたものであるかどうかは，他の人々が書いた過去の論文を読み，整理しなおすことが大切である。研究とは目の前にある課題への解答を与えることであるが，課題の設定は過去の人々の議論に耳を傾けることで分かる。できる限り良質な議論を参考にする必要があるので，いわゆるランクの高い学術雑誌に掲載された論文を読むことや，国際学会での議論に参加することが大切である。また，周囲の先輩やクラスメート，あるいは教員に自分のアイデアを話すことも，自分の議論の再整理や視点・論点の不足の補完に有効である。

他者との優劣については，次のように考え，対処する。大学院での生活は，社会人としての人生の一部である。他の業種と比べて，個人が負う責任は大きくないものの，ストレスはどうしても避けられない。なぜならば，自分で解こうとしている問題が一向に解決しない割に，自分より圧倒的に「仕事ができる」人がいくらでも目に付くからである。

しばしば学者や研究者は世間知らずだと言われることがあるが，それは必ずしも正しくない。いわゆる同期はもちろんのこと，先輩や自分が授業を受けている教員，果ては世界中の研究者と自分を比べることになる。いわば，大学院生は，研究については世界で起こっている競争に急にさらされるのである。これは，大学院生にとっては良くも悪くも作用する。学生は野心的に世界に挑戦を仕掛けることができ，世界もそのような学生に対して常にオープンである。これはとても楽しいことである。しかし，その一方で，自分の不足を常に思い知らされ続けることは，決して快いものではない。この不快さへの対処は単純である。世の中は甘くないことと，自分の不足を潔く認めることである。実も蓋もないことを言っているようではあるが，これしかない。そして，我々はより学び，考えるのである。

最後に，体力である。動機低下の最も根本的な原因には体力低下がある。よく寝て，よく食べ，よく動くことが大切である。特に寝ることと食べることは決してやめてはいけない。

4　就職の不安について

では就職に対する不安は，どう拭いさればよいのだろうか。そもそも本稿は，学生諸氏にとっての大学院生やその後の教員としての自分の姿を具体的に描くことの難しさを，解消することを目標としていた。真実を告白してしまうと，これについては打つ手がない。強いて

言えば楽しむしかないのである。大学院生としての日々においては，この不安を薄く感じてはいるものの，日々論文執筆に忙しいため，不安を感じる暇がない。それなのに就職時期になると，急に不安がやってくるのである。

いわゆる茹でがえるのようなものだろうが，我々とても馬鹿ではないので，かえるほど状況を把握していないわけではない。しかし，なにせ就職市場のありさまについては，伝聞にたよるばかりなのが実情である。そして，自分の番になると，急にピストルを鳴らされてプールに飛び込むような気持ちで市場に参入するのである。もっとも，泳いでいる間がそうであるように，就職活動中も無我夢中というわけではなく頭を動かすことができる。これが我々の心には必ずしも良くは作用しない。状況の悪さを観察していると，自分の人生を振り返ったり，人と自分を比べたりしたくなるのが人間である。おそらく我々が対処すべきところはこの点だろう。

対処の方法はいたって単純であり，主に３つのこつがある。人と自分を比べないことと，決して諦めないこと，そして孤独にならないことである。他人の人生は他人の人生であり，自分のものではない。そもそも人生の長さからして公平でないのに，他人と自分が公平に扱われることを望むこと自体不自然なのである。自分の人生は，自分の価値基準にもとづいて悠々と楽しまねばならない。逆境すらも自分の掌の内に置くことが大切である。

しかし，これも過ぎると，怠惰に似た態度に人は行き着くので注意が必要である。そこで，自分の仕事をより良いものにすることについて，諦めないことが肝要になる。ひたすらに磨かねばならない。人を騙すことはできても，決して自分を騙すことはできないのである。

しかし，と書くとしつこくなるが，これも過ぎれば孤独を深める一方である。研究は孤独な旅であるが，ヒロイックである必要もない。しかもこれは就職活動である。辛いときは先輩でも後輩でも，友人でも教員でも誰にでも声をかけて愚痴を言えばよいのである。昨今世間では，愚痴を言うことは非常にネガティブに捉えられているようであるが，研究者たるもの世間の流行に左右されてはいけない。辛いことを辛いと言うのに何の遠慮があるだろうか。世の中相身互いである。暗く明るく日々を暮らせばよい。最終的には，決まるべきところに必ず就職先は決まる。なるようになるのである。

5　お　わ　り　に

本稿は，甚だ短くではあるが，大学院に進学するうえで学生諸氏が不安に思っていることに対して，向かい合うこつを述べた。いずれの場合も，周囲の人とのコミュニケーションを取りながら，諦めずにやっていくことで「なるようになる」というのが，私の結論である。

私がこのようなことを書くのには理由がある。神戸大学やオハイオ州立大学の大学院にいる間，それどころが今に至るまでずっと，私は不安なのである。しかし，それでも自分の考

えを提示しなくてはいけない。今でこそ起こらなくなったが，アメリカでは真夜中に，自分の愚かさ加減にうんざりして，嘔吐したこともある。それでも生き残らなければならない。

最後に，私がこれまで先生方にいただき，大切にしているふたつの言葉を紹介し，さらにひとつ付け加える。

“You cannot fool yourself.”

「自分が偉いと思ったら，そのときは終わりですから観念してください。」

「なるようになりますよ。」